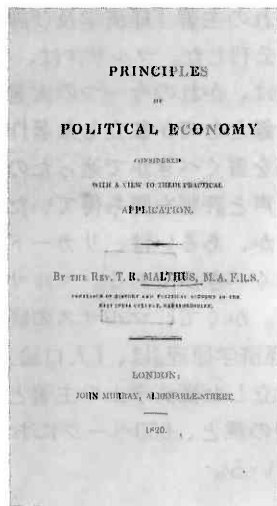


館蔵資料紹介



T. R. マルサス 『経済学原理』、初版について

商経学部経済学科助教授 磯川 暁

Thomas Robert Malthus, *Principles of Political Economy, considered with a view to their practical application.* London: John Murray, 1820. v, 601p.

2nd ed.: with considerable additions from the author's own manuscript and an original memoir, by Bishop Otter.

Ed. by Edward Maltby, bishop of Chichester. London: W. Pickering, 1836. liv, 446 p.

邦訳 初版の訳、小林時三郎・訳、上下、岩波文庫
1968年

第二版の訳、依光良馨・訳、上下、春秋社
1949-54年

1. マルサスの略歴

マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834)は、イギリスのイングランドのサライ州(Surrey)に、1766年にダニエル・マルサスの次男として誕生した。マルサスは、家庭で父の教育を受けた後で、18才の時、ケンブリッジ大学のジーザス・カレッジに入学した。4年後には、彼は、数学優等生試験に合格し、卒業した。彼は、この当時ではオックスブリッジ大学の卒業生なら当然に進んだ進路の一つであった聖職に就き、サライ州のアルバリ(Albury)の副牧師と

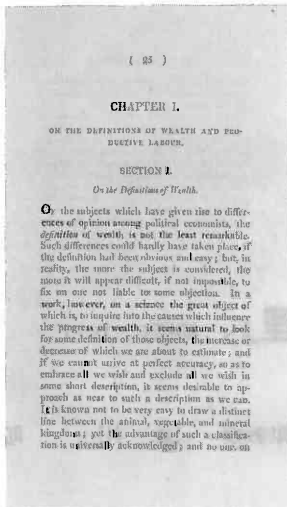
なり教区に赴いた。その後も、彼は、ケンブリッジに赴いたりしながら、研究を続けた。

18世紀末のフランス革命、19世紀初めのナポレオンのヨーロッパ遠征などと世の中は、一種の危機の状態にあった。社会主義的思想も顕著になっていた。折しも、1797年に、グッドウィン(William Godwin)の『研究者』が公刊されると、その社会主義的主張に反論するために、マルサスは、『人口論』を匿名で公刊した。この著作は、大きな反響を呼び、様々な意見が寄せられた。マルサスにとっては意外な大反響にこの著作整序拡充すべく第二版(1803年)で大改訂をした後、第6版(1826年)まで重ねた。

この『人口論』によって、マルサスは、この当時世に知られることになった。現在においてマルサスを振り返るときも、この人口論を抜きにしてはマルサスは語れない。マルサスは、1804年に設立されたばかりの東インド大学の近代史と経済学の教授に任命され、以後生涯この地位にとどまった。

2. 『経済学原理』の出版

『人口論』で有名になった、マルサスは、人口や社会問題で多くの人たちと活発な論争をなし、その成果を『人口論』の改訂、増補として、公表し



た。それとともに、次々と経済学の著者も公表した。1800年には、『食料高価論』①、1807年には、『救貧法改革案に関するサムエル・ホイットブレッド宛の手紙』②、1814年には、『穀物関税法の効果の諸考察』③、1815年には、『外国穀物輸入制限政策にかんする見解の諸根拠』④と、『地代の性質と増進の研究』⑤を発表した。そして、これら経済学著作の延長上ないし総括として、1820年に『経済学原理』を発表した。さらに1823年には、『価値尺度論』⑥、1827年には、『経済学における諸定義』⑦を発表した。

以上がマルサスの経済学上の主要著作である。これらの著作は、かれが『人口論』で展開した社会思想を基底にして発展させたマルサスの経済学の建設であった。しかし、マルサスが自分の経済学を整理し、理論的洞察を深めて、経済学説を建設することへの実際の契機になったのは、リカード(David Ricardo, 1772-1823)及びその『経済学及び課税の原理』⑧であったといわれている。

マルサスは、1811年に自ら進んでリカードとの交遊を求め、印刷物や手紙の形での討論よりも会話による討論を選好したといわれている。かれら二人の経済の基本問題の見解は、最初から食い違っていた。1815年頃にイギリスで展開した穀物法論争では、保護貿易の立場に立つマルサスと、自由貿易の立場に立つリカードとの

論争は激しかった。かくて、二人の見解の対立は、経済学のあらゆる分野に拡大した。リカードは、かれの主著『経済学及び課税の原理』を1817年に公刊した。マルサスは、少し躊躇した。というのは、かれの今一つの大著である『人口論』の付録としてか独立した著作として経済学上の主著を書くべきかで迷ったのである。既に大きな名声と評判を勝ち得ていた著作の大改訂とすべきか、あるいは、リカード学説への反論として書くべきかである。マルサスは、後者を選択した。かくて、マルサスの経済学上の著作である『経済学原理』は、『人口論』の付属物ではなく、独立した経済学上の主著となった。初版は、七つの章と、600ページにおよぶ長さで構成されている。

3. 『経済学原理』第二版

『経済学原理』初版を刊行した後、マルサスは、『人口論』の改訂をしたり、その他の著作を発表した。その間にも、マルサスは『経済学原理』の改訂にも手をつけた。しかし、改訂作業は、マルサスの死亡によって、途中で途絶した。改訂作業は、マルサスの友人であった、オッター(Bishop Otter)によって仕上げられた。オッターは、初版にマルサス自身が書き残したマルサス略伝を冒頭におき、マルサスが初版本に書き入れていた改訂文を入れ換えて、1836年に第二版を刊行した。マルサスは、初版の改訂作業を全部完了することなく死亡した。それゆえ、もしマルサスがもう少し長生きしていたら、現在の第二版とは違ったものが存在したであろうことは容易に想像できるであろう。

4. マルサスの『経済学原理』の意味

既に述べたように、マルサスは『経済学原理』を、リカードの経済学説に反対するために公刊した。リカードに反対すること、このことによって、マルサスは、経済学史上では、異端とされた。というのは、リカードこそは、古典派の正統派の重鎮であったからである。リカードは、

と言うよりは、古典派は、利潤率が均等化すると説いた。マルサスは、これにたいして、利潤率は相違していると説いた。この原因の一つとしてマルサスは、商品の価値が生産費だけでなく需要—マルサスの言葉では、購買力と購買意志—にも支配されると説いた。すなわち、今日的にいえば、マルサスは、価格が需要と供給の相互に支配されると説いたのである。この点に限れば、マルサスの方が今日的なのである。そして、この点の中に、今日ではマクロ経済学の創設者として知られているケインズが古典派の時代には異端と見なされたマルサスを、肯定的に評価した秘密が存していたのである。

すなわち、マクロ経済学と古典派のそれとの決定的相違の一つは、貯蓄と投資との関係に概念にある。今日では、貯蓄は自動的に投資される保証はまったく無い。古典派は自動的に投資されると見なしたのである。ただし、マルサスだけは例外であった。一見不生産的に見え、古典派では否定されていた、支出でも是認したのである。ここに、現在の貯蓄と投資との関係の認識の萌芽が存していたのである。

and Use of their Terms, with Remarks on the Deviation from these Rules in their Writings.

- ⑧. Ricardo, David. On the Principles of Political Economy, and Taxation. 1st ed. 1817. 2nd ed., 1819; 3rd ed., 1821.

- ①. An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provision.
- ②. A Letter to Samuel Whitbread, Esq. M.P. on his proposed Bill for the Amendment of the Poor Laws.
- ③. Observations on the Effect of the Corn Laws.
- ④. The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn.
- ⑤. Inquiry into the Nature and Progress of Rent.
- ⑥. The Measure of Value stated and illustrated, with an Application of it to the Alterations in the Value of the English Currency since 1700.
- ⑦. Definitions in Political Economy, preceded by an Inquiry into the Rules which ought to guide Political Economists in the Definition

